

元

ヤンママは、

♡体 払い!

「学習費の、そんなん、  
体で払ってやる!」

「じゃあ、  
そるそる合体するか!」

元ヤン、  
娘の学習費のためか?

本編：全47ページ  
基本CG:10枚 差分:26枚  
プレイ内容：乳・フェラ・クニニ  
・騎乗位・正常位

僕は新任、  
児玉和也(20)。

今日も良い天気である。

ふう。今日も何事もなく終わってくれればいいな。

僕は子供好きだったんで、この職を目指した。  
だが、現実には甘くはなかった。

子供は予測不能だ。

ケンカしてたたき合ったり、服や床を汚したり……  
次は何が面倒を起こすのか。

すべて処理するのは先生である、自分の役目。  
何もなかった日が今までのないのだが。

まあ子供はしょうがない。

というより、それが僕の仕事なのだ。

……

子供はいいんだ。子供は。

今僕が抱えているのは……



霧島純子。32歳。  
霧島ナナちゃんを子にもつ、  
元ヤンキーを語る美人巨乳ママだ。  
いつも目のやり場に困る。

「なんだよ先生。今日も固い顔して。  
そんな顔じゃ子供に嫌われるぜ！若担任！」

「いえ、元々こういう顔ですので大丈夫です。」

実はこの親、娘の学習費を滞納しているのだ。

金をまた、ネックレスやイヤリングなど、  
高級品につかっているのだろう。

おそらく払う気はないだろう。

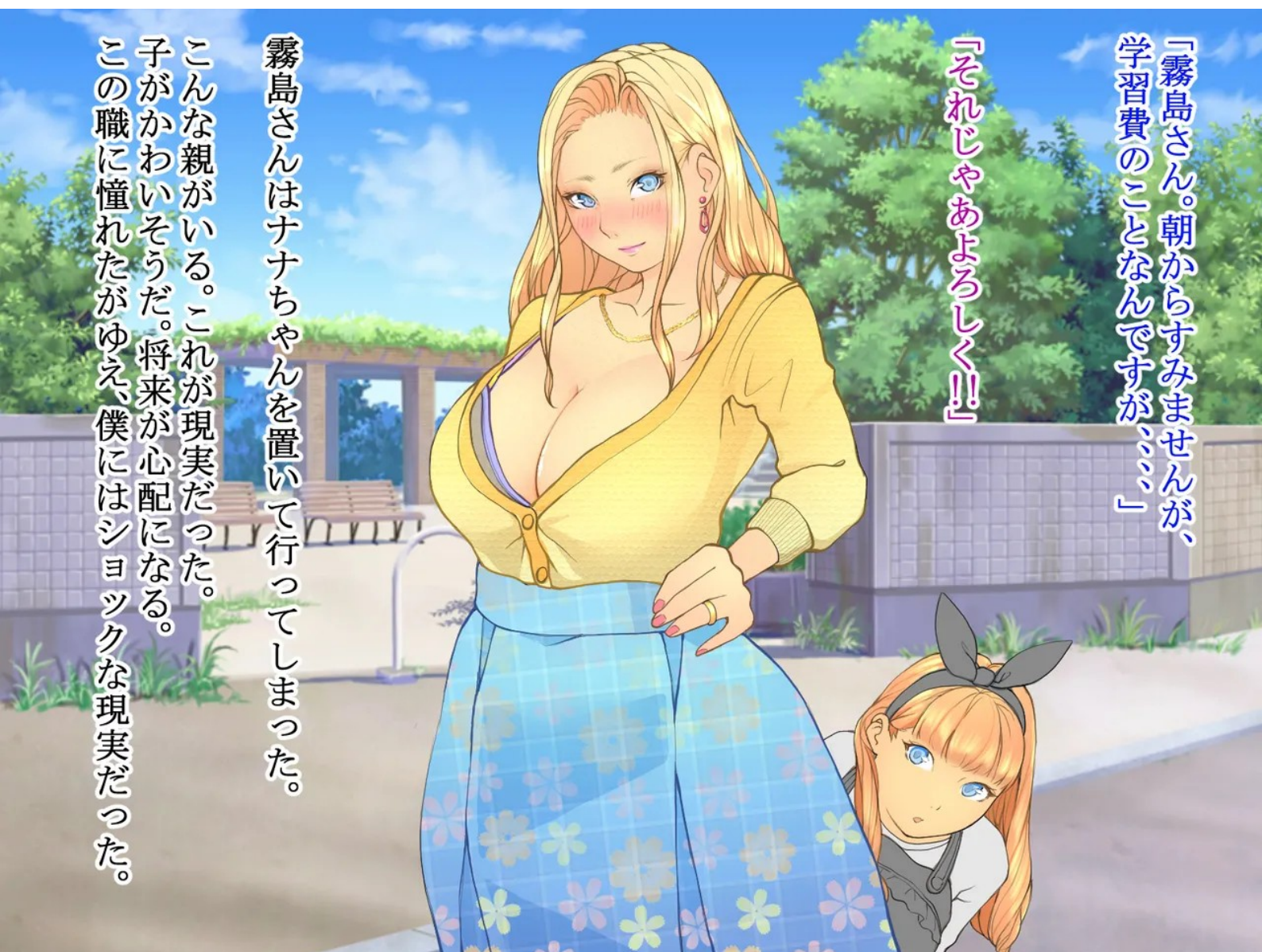


「霧島さん。朝からすみませんが、  
学習費のことなんですけど、」

「それじゃあよろしく!!」

霧島さんはナナちゃんを置いて行ってしまった。

こんな親がいる。これが現実だった。  
子がかわいそうだ。将来が心配になる。  
この職に憧れたがゆえ、僕にはシヨックな現実だった。



A sunset scene in a park. The sky is a warm orange-red color. In the foreground, there is a concrete path and a low wall with a grid pattern. In the background, there are green trees and a park bench. The text is overlaid on the scene.

夕方。

ふう。やっと仕事が終わった。  
体はもう疲れ果てていた。まだ二十歳なのに。

子供たちは遊び疲れたと思いきや、  
親が向かいにくると、また元気を取り戻し  
一緒に帰っていった。

子供はなんて活力溢れているのだろう。

自分にもこんな時期があったとは思えない。



ん？ まだ残っていた子がいた。

霧島ナナちゃんだ。

まったく学習費を滞納している上に、  
子供まで、一人にして。

なんて親だ…。

「うお!? よっ先生おつかれ!」

やっときた。  
担任として一度ガツンと言わねば。  
これも経験だ。

「ナナ! 帰るぞ!」

「あの、霧島さん。ちょっと待ってください。」  
「ん?」

「学習費を払っていただきたいんですが。  
いいかげん困ります。」



「んーと。あとでな！ じゃー！」

霧島さんは帰ろうとした。  
今日と言う日は帰さないぞ。

「いいんですか!? 滞納費どんどん高くなりますよ。  
あなたみたいな親を見ると、  
ナナちゃんの将来が心配です！」  
言ってしまった。



「な!？」

そこでナナちゃんが霧島ママに聞いた。

「たいのう? たいのうって何? ママ。」

!?

「うっ…」

これは…さすがに効いたか…



「ちっ わかったよ……」

お？ 態度は悪いが、観念したか。

「払うよ！払えばいいんだろ？」

「うっ……」

霧島ママは少し黙ってから、  
「ナナ、少しここで待ってる！  
おれはこいつと大事な話をするからな！  
おい、トイレはどこだ！」

と言って僕の手を無理やり引っ張った。

「ちよ!？」



僕はなぜか、男性トイレに連れてこられた。  
突然の出来事に理解が追いつかない。



「おい児玉！」

急に呼び捨て!? ひどい。さすが元ヤンキー。

「お前童貞だろ？」

「???? まあ...そうですけど、関係あるんですか!？」

「じゃあここは一つ。お前とセックスしてやる。

その代わり学習費タダにしてくれ!!」

はあ!? この人何言ってるんだ!？」



でも... 霧島ママの体には多大なる興味がある。

エッチできるというのは悪い話ではないが...

「え... 本気ですか!？」

「本気だ!! どうせお前ヤツた事ないだろう?

セックスぐらい、おれにとつてなんてことない!」

「滞納費とこれからはどうするんですか!？」

「それはお前が払うんだよ!! 当たり前だろ?

毎月おれがお前に体で払うんだよ!! いいな!!」

うーん。霧島さんの体を毎月好き放題できる……  
なかなかこんな人とやれる人はいない。  
おまけに童貞を卒業できる。最高だ。  
だが、代償に学習費を肩代わりする。

うーん……

……月1万3千円か……

風俗つてのより安そうだなあ。

僕は童貞ということ、仕事の疲れは言い訳になるが、  
目の前に広がる谷間の誘惑の虜になり、  
承諾してしまった。



「よし！ 児玉は話が早い!!  
約束だぞ！もし、金を肩代わりしなかったら、  
レイプされたって騒ぐからなw？」

「え」

「冗談だよ。頼むぜ児玉。  
それに損はさせねえよ。」



「この乳すげえだろ？ 体には自信があるんだ。  
きっと先生の頭ん中猿になるぜw」  
僕はこれから人生初のエッチをするのか…  
ドキドキする。」

「何ぼーとしてんだ？ サッサと個室いくぞ！」

僕は霧島ママと個室に入った。  
我慢できず、乳を後ろから鷲掴みにした。

「おい!? びっくりしたじゃねーか。」  
「すみません。我慢できなくて。」

霧島ママの乳は大きくて柔らかい。  
初めて女の乳を触った。

「柔らかい。けどすごい揉み応え。すっげえ。」  
しかもめっちゃいい香水の匂い。鼻にガツンと来る。  
こ、これが女なのか…

「どうだ? すげえだろ?」  
童貞先生、揉むだけでいいのかwww?」



僕は丸裸の乳を見たくて、上着を思いっ切り掴み上げた。  
霧島ママの見事な巨乳が、あらわになった。

「!! 児玉先生童貞なのに、結構強引だな。」



乳首は綺麗なピンク色。形も大きさもエロイ。  
理想的な乳だ。この人が一児の母とは思えない。  
セックスするために生まれた体だ。

「どうだ？ 先生？  
女の乳、初めて見ただろ？」

「はい。すげえっす。  
こんなデカくて、乳首がピンク色だと思わなかった。」



「ww すげえだろ？  
おれのは結構【すげえ】みたいなんだ。  
過去の男はみんな猿みたいしやぶったからな。」  
「どうだいじってみるか？ 母乳も出るぞ？」

僕は邪魔なブラを取り払い、  
前から揉みしやぶった。

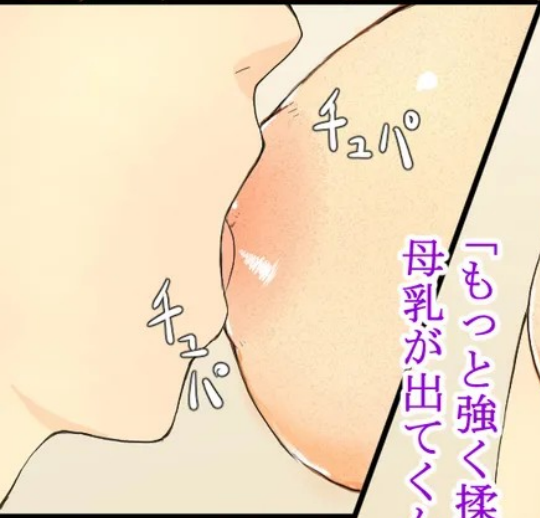
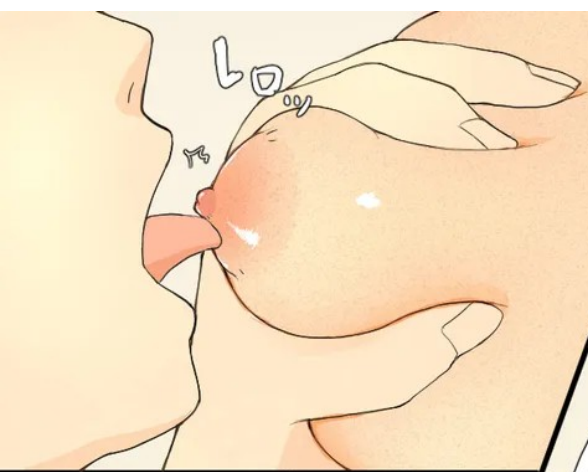
絶景だ。  
乳もたまんねえ！

「どうだ最高だろw？」  
「はい。」

んぢゅ

んぢゅ

「もっと強く揉んでみる、  
母乳が出てくんどぞ？」



僕はもつと強くもんだ。

確かに母乳ミルクが  
出てきた。

僕は、遠慮なく、

そのミルクを堪能した。

「はあはあ、うまい！」

「ははw 先生変態だな。」

僕はしばらく霧島ママ  
の乳を楽しんだ。

女ってすげえ。



「ハハっw 先生はほんとおもしろえなw」

「はあはあ」

「【すげえ】ばっかだな。  
そんなにこの乳が気に入ったか。」



「じゃあ今度はもっとすげえことしてやる。  
下脱げ。そこの便器に座りにな。」

「く〜」

「いいから。さっさと下脱いで座りな！」

「おお、やっぱり。大きくなってるやがる。先生も結構デカイの持つてるな。」

う、嘘だ!?

僕のちんこを

舐めてる!?

汚くないのか!?

だが、

気持ちいい…

霧島ママの手と舌が、優しく僕のちんこを撫でる。

「ああ、霧島さんの舌がヌルヌルしててすごく気持ちいい。」

カッ

しロッ



「フフっ♡ 先生のちんこもすげえじゃん。見た目のわりにたくましいなw」

俺は我慢できず、  
射精してしまった。

ツカ

レロッ

信じられない。僕の精子を女の口の中に出してる。  
霧島さんは平気そうに僕のちんこの先から出る白い精子  
を口の中に入れる。臭くないのか!?

ジュポ

ジュポ

ジュポ

ジュポ

「ふあ!? すごいっばい出てくる!!  
濃いなく。クセエW  
でもこういう精子がうまいんだ。」

ゴクッ



「おおー たまげたなあ

こんな立派なもん持ってたんだな。関心したぜ。

おれの旦那よりでかいぜ？」

「そうなんですか!?!」  
ちよつとうれしい。



「ああ……。それに精子もめっちゃ濃い……」

(もしかしたら中に出したら一発当たるな……)

「どうだ？満足したか？ムラムラ収まったか？」

「いえまだ全然。次は霧島さんのまんこ舐めたいです。  
いいですか？」

「つたくししょうがねえな。  
これだから童貞は。」




そういうと、今度は霧島ママが便器に座った。

元ヤンママって話が早い。

一児の母が着るものじゃないだろ。  
「パンツ邪魔ですね。えいやっ!!」  
僕はパンツを脱がした。

「ほい。  
まんことなると、  
やっぱり見せるのは少し恥ずかしいな!」  
パンツが薄いし、エロっ!!





「ひいー♡ あんま見んなよ！  
こんな明るいところで見せたの初めてだ。」

そこには程よく毛の生やした生まんこがあった。  
ここからナナちゃんが!!

「これが生まんこか！ほんとに穴がある…  
舐めていいですか？」

「ああ。好きにしゃぶってみな。」

「うおあつ♡ ばかつ♡ 中に舌入れんな♡!!」

これが女の穴。少し人間臭いが、  
今まさに女の領域に直に踏み入れた気がした。



バカ♡♡

チュパ  
チュパ

僕は舌でまんこの穴をほじくり回した。

「やべえ♡ 気持ちっ♡ 先生の舌やわらけえな!」



僕は、舌がびりびりと  
疲れるまで、

霧島ママの女の部分を  
しばらく堪能した。

幸せ♪

「先生気持ち良かったぜ♡

おれのまんこも、もうびしょびしょだよ♡

あんな舐めたけど、そんなにおれのまんこ良かったか？」

「すごく良かったです♪ なんか女の秘密、立ち入り禁止区域に入った感じがします。」

「……んーよくわかんないけど……」



「臭くなかったかw? シャワーも浴びてないのにw」

「まあ ちょっと匂いましたが、平気な範囲です。」

「そっか♡」

「じゃあそろそろ合体すつか♪」

「いき……ますか。」

「さあ 裸になれ！」

おれはもう先生がクンニしたせいで、  
我慢できなくなったじゃねーかw」



「それに先生のちんこ、  
どんだけのもんか試してみようじゃねーかw」

いよいよ童貞卒業か……

これから僕のちんこを霧島ママに入れるのか!?  
そう思うと僕は勢いよく全裸になった。  
霧島ママも楽しそうに脱ぎ始めた。

「結婚してから、初めて他の男に裸を見せたな…  
さすがに恥ずかしく感じるぜ♡」

「霧島さんってやっぱりすごい体してますね。綺麗です。  
一児の母なのに、女フェロモンが半端ない。」

「まあなw  
腐っても女だしなw 体系は少し気にする。」



「ほら、便器に座りな！ 女に入れた事ないんだろ？  
きつとすぐ昇天してしまうぜw  
おれのまんこなら、なおさらw」

僕は便器に座った。すると、霧島ママは、  
便器に足をかけて跨ってきた。

僕のちんこが、ゆっくりと霧島ママに入っていく

ヌルッ

信じられない光景だ。僕のちんこが、まんこに入っている。中は温かくヌルヌルしてる。

ふっ♡

ズシッ

ズポッ

「すっすげえ♡ こりやたまげましたちんこだ♡ おれが昇天しちまいそう♡」  
「うっ やべっ 気持ち良すぎ…」

霧島ママはゆっくりとちんこを出し入れた。  
やばい。出そう。いいのか!!  
中に出るぞ!?! ヤバイ!!

どっポ

ごめんナナちゃん。

今先生は君のママと、  
大人の合体しています。

パパのじゃないちんこが、  
ママに入っています。

ごめんナナちゃん。

僕は先生失格です。

童貞の先生を許してください。

それでは中に発射いたします。





「ああっ イった…」

ドロロ

「うわあ!! あったけえ!  
てめえw 中に出したなw」

やばっ  
♡

「うう 気持ちいい…」  
「ったくもうー。出しちゃったら、  
しゃーねえ、最後まで出しやがれ！」

ウウ

僕は霧島ママの言葉に甘え、  
たっぷりと精子を発射してしまった。  
どうか妊娠しませんように。  
あまりのまんこの気持ち良さに、  
僕のちんこはまだ収まらない。

僕らは本能のままに、体勢を変えた。これが猿か…

「おいおいw まだ収まってねえなw  
やるじゃん♡ おれもまだヤリ足りねえ！」

僕らはまたちんこをまんこを出し入れた。

「うおお 最高♪  
おれの子宮にガツンとくる♡」

「はあああ♪  
僕も最高です♪  
霧島さんのまんこ  
気持ちいい♪」

「先生のた、たまんねえ♡  
もつと奥までついてえ♡!!」

「はいっ!!」

やべえまたきた。イクッ!!  
僕は猿みたく己のちんこをぶち込んだ。



イッた...

「ああ... 出たあ...」

あぁっ♡

キョッ♡

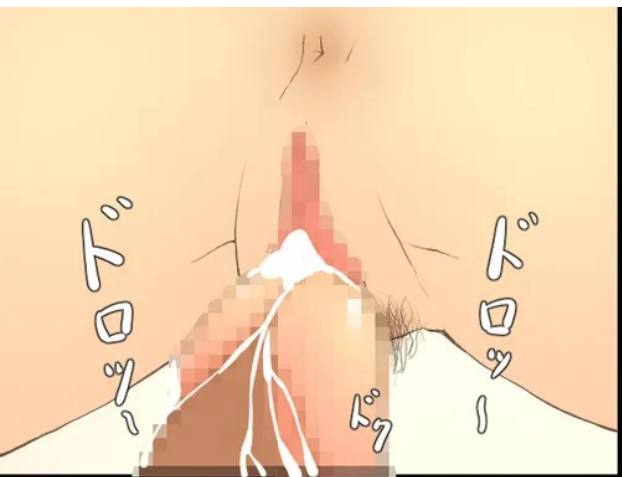
「ああっ♡ ヤバイっ♡

めっちゃ出てるw

さつきより量すげーな。

先生も男だったんだな。」

「はい。」



「でも、中に出してもいいなんて一言も言っていないんだけどな。」

「はい。でも僕も男なんで...」

「こりや半分レイプだぞ。先生。」

「でも、霧島さんも、腰動いてましたよ?」



「へえ 先生も生意気なつたもんだな。生意気なのは口だけじゃなくちんこもだ。まだ全然ヤル気じゃねーか♡」

「はあはあ。いいからメスは、黙ってぶち込まれてください。」

僕はさらにちんこを激しくぶち込んだ。まだイク。セックスしてやべえ。永遠に腰を振れそうだ。生まんこが気持ち良すぎる。オナニーなんて非じゃない。

「メスだと!? はあはあ。調子乗りやがって、どんだけ中に出すんだよw 猿!」  
またイク。ダメダ。やっぱ中だ。  
「ああっイク!!」



はあはあ。これで、全部出し切った気がする。  
さすがにちんこは収まった。

「あーあ。こりやまいったな♡  
お腹熱ちいし、もうパンパンだ。」

「はあはあ。あー気持ちよかった…」

「まあ おれも久しぶりにイッちまったw  
が、さすがにこれは…やべえよな…  
先生の精子は濃すぎる…一発あるかもなこれ。」

霧島ママが少し焦っているようだったが、  
僕は4回発射した後の賢者モード。  
何も考えられなかったのは言うまでもない。



「おいおい。こんな出すなんて、  
約束してないぞ！」

「すみません。あまりに気持ち良すぎて……つい。」



「毎月こんな出されたら、  
さすがに先生の子を孕んじまうぜ。」

「つ、次はコンドーム用意しますんで、  
今日のところは……」

「コンドーム!? そんなん持って来てどうすんのさ!  
セックスは生でしないと意味ないだろう!」

えっ それじゃあ…

「すみません。そうですよね。  
じゃあ今度から外に」



「はぁ!? 出すなら【中】だろ!!  
セックスだぞ!! 先生頭ん中も幼稚園か!!」

「えええ それじゃあ  
いつか妊娠しちゃいますよ!」

「当り前田のクラツカーだなw  
ちんこをまんこに入れて中に昇天するまでが、  
【セックス】さ！そうじゃないと女を感じないだろう。」

「え、でも」



「ヤツた男の子を孕んだらその時はその時だ！  
所詮おれも女、先生も男だしな。本能に従うさ。」

「……？」

「…実は先生みてえな男ととヤツてみたかったんだ。  
いかにも童貞そうで可愛かったから。  
つい女を教えたくて。ハハっw」

ちよつと嬉しいが、複雑だ。  
相手がナナちゃんのママ……

「僕も霧島さんみたい綺麗な人と初めてできて、  
嬉しかったです。ほんとに。」

「へへっw 言ったらろ♡？」

体には自信があるって。でもママになってから、  
めったにヤツてないんだぞ！ ありがたく思え!!」



確かに僕はついてるかもしれない。

「あ、あと当然、学習費はよろしく頼むぞ!!」

「……はい。」

僕の今月のお小遣い、精子とともにさようなら。

「よっ!! ただいま。ナナ!! 待たせたな。」

「ママおそーい!! 先生と何してたの!! 早くおうち帰りたい。」


「わりいwわりいw 話がだいぶ長引いてなw」

「ごめんナナちゃん……でも君の学習費は確かにママからもらいました。」

「それじゃ先生!! 気持ちよ、じゃなくて、ナナをサンキューな! また明日からよろしく頼むぞ!!」

そう言ういうと、霧島親子は手をつなぎ笑顔で帰っていった。





あれからどうなったかというと・・・  
数か月たった話だが・・・

ガツツりやつぱり妊娠してしまった。

「ははっ……  
わりのい できちまったww」



「まあ 焦んなってw」

「うう…」

「この子も、おれと先生が、  
頑張った愛の量の証さ!!  
しょうがねえ!!」



「うう…」

ど、どうしよう 頭が痛い。

「この子はおれの体に宿ってるんだ。  
心配すんな! 母ちゃんとして大切に面倒みるよ!  
【セカンド】パパっ!」

セカンドパパっ!? ぐはっ

「まあ……とりあえず」

ど、どうしよう…… よりによって人妻

「とりあえずセックス……するかw?」

「はい!?!」

「まあ 先生の子できちまったもんはしようがねえ。考えてもしようがねえよw。」

「でも、じゃあ……」



「まあ そのなんだ。  
この子の分の学習費、先払いつてことで。」

元ヤンって……  
すげえ。

完



元ヤン・ママ(2児の)34歳 霧島純子

注目ポイント!

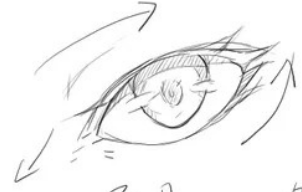
モウズと目ぱろ

包容力!!



耳の形  
かみかき  
(大人っぽさ)

かみかき+



目ぱろ

乳



大げつ

太さ



化粧品の?

おどろき

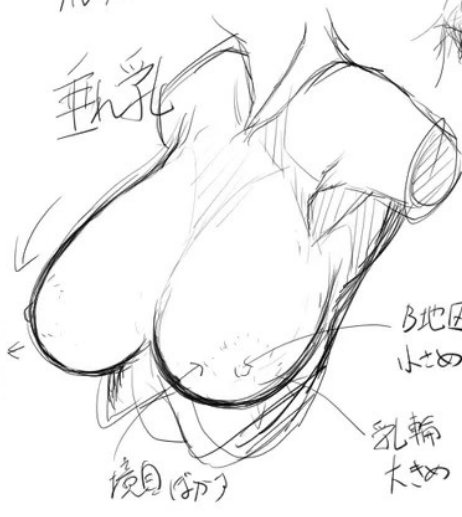


乳



乳

乳!



B地区  
小太

乳輪  
太さ

横目(印)